

美術学科 FD 研修 実施報告

(日時)：2025 年 3 月 10 日 (月) 14:00～16:00

(場所)：H214

(出席)：権田、新井、堀、大谷、本山、大場 (欠席)：和田

美術学科における成績評価の適正化を目的として、他大学の事例を参考に評価基準を検討した。授業規模が 20 人以上の場合、「秀」を 10%以内、「秀」「優」を合わせて 40%程度とする評価目安を教員間で共有した。また、各担当教員が後期授業の成果や課題を発表し合い、共通理解を深めた。授業評価分布については年 2 回の振り返りと検証を行い、評価基準の整備が進んでいる。コースや授業内容による偏りはある程度仕方ないが依然として残り、特に複数の要素を含む演習授業では評価基準の統一が難しい状況である。例えば、学生の取り組み姿勢や成長、社会的テーマへのアプローチなど、主観が入りやすい要素を含む課題では高評価が多くなりがちである。このため、外部評価との乖離を防ぐ観点から、高評価のつけすぎを避ける必要がある。

○新井 (マンガ・キャラクターコース、キャリアセミナー)

マンガコースでは、自発的に課題に取り組める学生と、最後まで取り組みが困難な学生が明確に分かれ、指導に苦慮する場面が多かった。キャリアセミナーについては、性質上評価を S や C と明確につけにくいいため、参加率やミニレポートで評価するしかない現状がある。就職活動に向けた学生の主体的な行動を評価するため、春季休暇中に実施する模擬面接や合同説明会への参加状況を具体的に把握し、学習評価シートの評価に反映させる方法を検討したい。

○大谷 (デザイン・ビジネスコース、ポートフォリオ演習)

総合経済学部との取り組みでは、美大から引き継いだ企業とのコラボレーション課題を実施し充実した内容であったが、一年生の後期に課題が集中し学生への負担が大きかった。学生間の能力差が顕著であり、全く対応できない学生もいる一方で、成長が著しく、教員としてやりがいを感じることも多かった。評価方法には課題があり、結果的に 8～9 割の学生に A 以上の高評価をつけざるを得ず、評価基準は検討の余地がある。テーマ設定による課題解決型授業の増加に伴い、高評価が固定化している傾向がある。外部評価では学生の自由な表現を肯定的に評価する一方、デザイナーとしての資質を意識しすぎることによってスケールが小さくまとまりがちな傾向が見受けられた。卒展等で外部に対してもっと大胆な表現やアピールも必要でないか、という指摘もあった。

○大場 (インテリア・コーディネートコース、PC 演習 2)

全体的に突出した成果が見えにくい学年であったが、雰囲気はよく初の資格取得者が出るなど成果があった (2 年・吉村さん)。次年度以降は学科担当教員が不在となるため、資格取得の支援方法を再検討し、学内での全面支援から外部講座の活用を中心とする方針へシフトする予定である。学生が資格取得に向けた意欲を維持できるよう、日々の学習目標 (勉強時間など) を明確に設定し、継続的な学習を促すことが重要な課題となっている。学生の文章力や過去問への積極的な取り組みは評価できた。授業評価をする際、実技は良くても教科評価の影響でマイナス評価となる場合がある点は今後の改善が必要である。

○権田（染色・陶芸コース、工芸論）

工芸論では授業内でディベート形式のアクティブラーニングを取り入れることを目標に授業設計をしたが、卒展前になると欠席者が増え、ディベートのテーマとなる意見を書いてくれた学生が欠席する等ありうまくいかなかった点もあった。実施時期や方法を見直し、学生の参加状況を改善する必要がある。また、考え方は良くても課題提出がでないと大きく評価が下がってしまう点も改善点である。工芸論という論の授業の中で理解を促すための実技が評価の大きな割合を含めるのは検討の余地があるとの指摘もあったが、実技は技術の理解度を評価しており、今回は課題提出の点数割合を均等にした。レポート課題と同じにすることで学生が点数を理解しやすいようにしたのだが、その均等にした点数の累積評価については、今後も検討の余地があるように思われる。

○堀（ファッション・工芸コース デッサンⅡ）

ファッションコースでは、少人数コース特有の運営の難しさがあった。2年生では服作りへの興味が途中で低下し、卒業制作展においても例年3作品1組のところ、1作品のみとなる学生が出てしまった。公開オーディションでは、教員の熱意が学生に対してやや過剰であるように見え、調整を検討してはどうかとの指摘があった。デッサン2では従来、学生作品への直接修正を控えていたが、今年度は軽微な修正を加え、学生の理解を促した。一方で、上級クラスには授業外でも熱心に取り組む学生が多いものの、デッサン力全体の低下が近年の懸念点となっている。

○本山（油画・日本画コース、社会と美術論）

一年次は課題が明確で、迷いなく取り組むことができるため、良い作品を制作する学生が多い。しかし、二年次になると、課題を深掘りして自らテーマを設定することが求められるため、取り組みが停滞するケースが多く見受けられる。特に油画コースでは、後期に入り制作に行き詰まり、登校が難しくなる学生が増加し、指導が困難になることがあった。テーマ設定型の授業に対しては、他コースの教員からも様々な意見や提案が寄せられたが、全体的に評価が高く、制作過程がそのまま評価に反映されているのではないかと指摘も出された。

・まとめ 学修成果（人間性・社会性・専門性の）のフィードバックについて

美術分野は運動能力と違って適性が見えにくく、「努力だけで何とかなる」という誤解を学生が抱きやすいため、適切な指導が求められる。入学時点では美術に対する意欲を最重要視しているが、その結果として技術力や思考力、追求力に欠ける学生も見受けられる。本学科では「人間性（自己努力や深化する力）」「社会性（集団で働く力・就業力）」「専門的素養（美術技術・知識）」を学修成果として設定している。就職か作家として活動するかを明確にし、そのためには学生の適性を具体的に伝えることが不可欠である。現在行っている学習評価シートを使った面談は十分とは言えず、適性不足が明らかな学生には、より早期に具体的で客観的なアドバイスを基に、学生自身が冷静に進路を検討できるよう支援していく必要がある。また、学生の自己肯定感のバランスを保つため、自己肯定感の低い学生には励ましを、高すぎる学生には適切なフィードバックを行うことを確認し、次年度へ向けて取組んでいく。